

徳田和夫氏所蔵『酒煙草合戦』解題と翻刻

伊藤 慎 吾

(本学准教授)

室町時代以降、『平家物語』や『太平記』といった軍記物語語り物のパロディの一種として、人間世界とは異なる異類たちの世界を舞台とし、そこで繰り広げられる合戦を描く物語が数多く生まれた。それらを異類合戦物と呼ぶ。江戸時代も一八世紀になると、酒・茶・菓子（特に餅菓子）といった嗜好品が擬人化して、嗜好品同士の合戦物語が多様化していく。その一つに酒の勢力と煙草の勢力による論争から武力衝突に発展する物語がある。それが本稿で紹介する『酒煙草合戦』である。梗概は次のようにまとめられる。

- 1 五盃後の天目の御宇、酒宴で酒の大將能登守七尾の庄司と煙草の大將九州探題薩摩守国部太郎吞吉の間で酒煙草の優劣・要不要をめぐる論争が起きる。
- 2 その夜、国部は触れを回して軍勢を集める。
- 3 一方、煙草方の動きを知った味醂酒は軍勢を集め、先手を打つべく国部の城のある薩摩に軍船を出す。
- 4 煙草方は籠城戦の準備を整える。
- 5 酒方は薩摩に上陸し、国部の城で攻防戦が行われる。この間、国部太郎は櫓の上から煙草の得、酒の損を説き、煙草方の軍勢に檄を飛ばす。
- 6 宇治の初昔権守坪房・美濃の足長出葉の庄司が戦場に駆けつけ、帝の勅諭を伝え、酒と煙草は和睦する。

興味深いのは、餅（菓子）と酒による合戦物が室町時代から明治以降の近代に至るまで文芸伝統として多様に展開していったのに対して、酒と煙草による合戦物は現在この物語のほか、二つの異なる作品しか確認されていないことだ。それ以外には論争物である『酒茶多葉粉口論』（たばこと塩の博物館所蔵・写一冊）があるが、これは酒と煙草だけでなく、茶も含まれるので、正確には酒と煙草の論争物ということにはならない。ともかく、両者とも嗜好品でありながら、煙草が題材になりにくかった理由については別稿で論じたい。

さて、『酒煙草合戦』はここに紹介する徳田和夫氏所蔵の写本の他、現在二本が知られている。すでに『たばこと塩の博物館所蔵資料翻刻集』に翻刻・釈文が掲載され、また語釈も施されている。一つは第三集（一九九八年）収録の『酒煙草合戦』（A本）、もう一つは第四集（二〇〇〇年）収録の『酒煙草の合戦』（B本）である。

徳田本の特筆すべき点は、奥書に「安永四年」（一七七五年）とあることである。博物館B本には奥書がなく、同A本には「安政四年」（一八五七年）とあることから、幕末期の書写になることが分かる。三本ともに本文の異同が大きいのであるが、単純に考えれば、とりあえず徳田本が最古本と見られ、本文的にも原本に近い可能性が高いだろう（別稿に譲る）。

成立事情については今後の課題となるが、A本の解題に当たる『酒煙草合戦』について「（無記名）に「仙台浄瑠璃（あるいは奥浄瑠璃、お国浄瑠璃）であるという指摘もある」という記述が見える。誰の指摘であるか明記されていないが、これについて解題者は「仙台というよりも日本海側の地域と深く関係している。そのため、現在のところ、仙台浄瑠璃とは分類しきれない」と否定的である。

このように、本物語については不明な点が多い。そこに徳田本が出現したことで、改めて考えてみる必要が出てきたわけである。なお、徳田本には、『酒煙草合戦』に続き、「酒得失之論」という短編の論が収録されている。

最後に書誌を簡単に示すと次の通りである。

書型 仮綴

寸法 たて二三・〇×よこ一六・二纏

料紙 楮紙

外題 酒煙草合戦（中央・直・墨書）

内題 酒煙草大合戦（前見返・中央）

酒煙草合戦（本文冒頭）

丁数 一七丁

「酒煙草合戦」（一〇一―一四〇）

「酒得失之論」（一五〇―一七ウ）

行数 九行

本文 漢字平がな交り文。振りがなは片かな。

奥書 「酒煙草合戦」本文末尾（一四ウ）に次のようにある。

阿部氏

安永四年乙卯月吉日写之重徃「花押」

「阿部」は「坂井」を抹消して重ね書きする。また、一七丁ウラに、後表紙によって隠されるかたちで次のような奥書がある（図3）。

丁酉四月下旬四日小林氏写取

備考 右の二つの奥書から、「安永四年乙未」はこれを書写した記録ではなく、親本である小林氏蔵本に付いていた奥書であること、「丁酉」

が「酒得失之論」を加えた本書の書写奥書であることが考えられる。そして、前見返に「片桐氏朝作用」とあることから推察するに、

安永六年に片桐朝作用なるものが小林氏から安永四年の奥書を持つ『酒煙草合戦』を借り、これを転写し、さらに「酒得失之論」を付録として加え、作成した。これが徳田本ということになるだろう。

図1 表紙

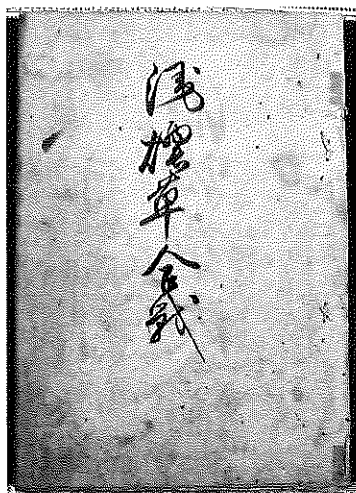


図2 前見返及び巻頭

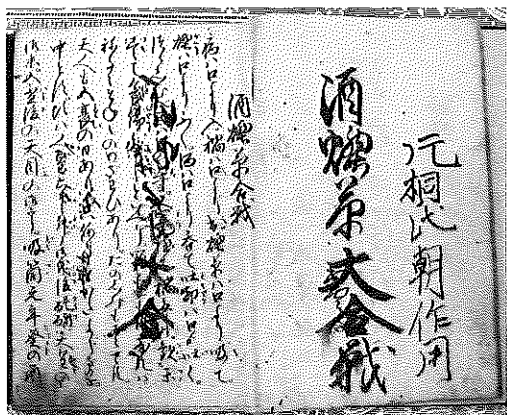
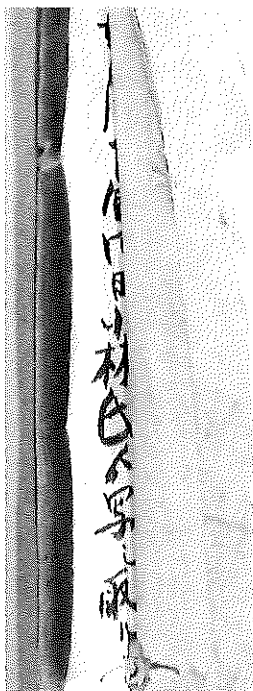
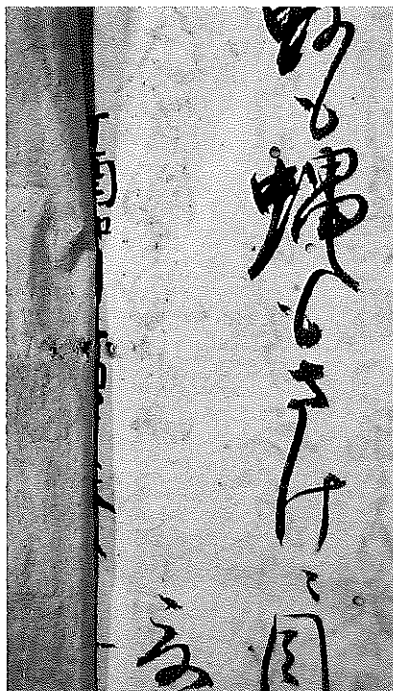


図3 『酒煙草合戦』末尾



【後記】 本書の翻刻と画像の掲載をご許可くださった徳田和夫先生にお礼申し上げます。なお、本稿は公益財団法人たばこ総合研究センターによる二〇二二年度研究助成の成果の一部です。

【翻刻】

酒煙草合戦

「(中央・打付)

片桐氏朝作用

酒煙草大合戦

「(前見返)

酒煙草合戦

病は口より入。禍は口より出。煙草は口より吸て。

煙は口よりふく。酒は口より吞て吐却は口合吐く。

つゝしむべきは口の三寸。又龍極て禍多し。飲楽

尽て哀傷多しといへり。寵愛も片寄れば。

ねたみそねみのわざわひあり。たのしみも尽ては。

天人も五衰の日あり。只何事もかたよらざるを。

中とす。頃は人皇六年卯の御代。後醍醐天皇の

御末。五盃後の天目の御宇。吸筒元年 癸の酉

小夏八日の事成にある人々の集て酒ゑんの興

を催しける其夜の酒の大将は能登守七尾の庄司

と聞へける扱又煙草の大将は筑紫九ヶ国の探題

薩戸の守国部太郎吞吉也 始のはとは規義

だうくと有けるが酒盛しだひに長じければ

「一オ

酒ばかりてうあいせられたばこはいつとなく

てうあへうすくかたすみへ押こめられ事とひ

かはす人もなくたまくとたばこほん引よする

かたくとはいふきの内へときやくかす。は起斗り

也国日太郎むねんにおもへとやせんかくやと

おもふ折ふし下戸の人々酒盛退屈して

たばこほんよとめされける七尾申様これほど

けふ有座敷へたばこをめさるゝはきよくも

なしそうじてたばこいふやつめは酒や肴の

ふうみをちがわせあへやおさへの座をさまたげ

おりくと酒のしやまとなるけふこう酒盛、

座敷へめさるゝ事無用なりとぞ申しける

国部今はたまり兼上座へむずとなおり

いかに七尾座敷の掟をしらざるや忝も某は

初手の地走其次は茶を出しさて其次に酒

を出ス客によつて一向酒を出さぬも有リ是程

おとりし身をもつて人のてうあへ事はとて六升

余升を只一のみのふるまへ近頃以而慮外なり

そこ立されといふまゝにきせるおつとり盆に

ゆふくとひかへたる七尾を只一こぼしと打て

かゝる七尾もさすがはやわざにてさかなばし

「二オ

「一ウ

おつとりでうとうけてこゝをせんど、きりむ

「二ウ

すぶ一座の人々打おとろき双方へ押へだて

此度のらんしやうは我々があやまり也ひらに

こんどはしづまれと漸々わほくを入其夜は

事しづまりてわかや／＼へかへりけるされども

国部は七尾がしかたむねんに思ひとかく庄司が

たちへ押よせざんじかうちにふみつふしこん

どのむねんをはらさんと筑紫九ヶ国はいふに

およばず国々の一ぞく共へやがてふれをぞ

廻しけるあつまるつばもの共ニは先一番に

服部丹波守猶吉信濃守色吉吉野の判官幾坂

色左衛門さかせ川主水奥州には如来堂長葉ノ入道

浄念館の五郎吞勝西方野尻の一族出羽国ニは

米沢左近の将監荃長坂下の四郎立山小葉の

慰。越後国には田上彦四郎加瀬嶋青右衛門。一本杉

赤青左衛門をよし。関東一のあら武者甲州廣葉

之助和田の一ぞく九拾三斤其外国々のはむじや

ともまでわれおとらじとのし葉をしてこそ

あつまりけり都合其勢二十万八千斤はや

折たゝんとひしめきける此事四方にかくれなく

みりん酒かくと聞よりもたばこにせんをこさ

「三ウ

れんよりこなたより酒よせにおしよせたゞ

一つぶしにふみつぶさんとやがて国々へふれにけり

先みりん酒が家の子にじやくしくさいが柿の本の

酒丸つらの赤いが猿丸太郎うす赤色か花染

ゑもん酒の上の是吞壬生の只吞是を文武五人

男と名付扱又四天王とてかななべ源五酒綱。酒

樽民日公時。白井の酒水卜部の末酒平樽一人

武者保命酒其外国々の酒共ニは加賀の守

菊酒の与市撰津守伊丹諸白の前司和泉守

堺酒同舍弟羽衣の入道。すいかづらの別當。能の

登ノ守七尾の庄司奥州ニは若松入道圓心。仙臺

みたちの権太郎坪平越後国ニは与板長岡地蔵堂

の飛切加茂の五郎。三条五十嵐の小源次村上の土用

詰加治の軍治関ノ孫七新發田甘口の四郎笹岡

水原のつよむしや五泉には小夏の次郎諸白の

三郎村松柏持の小太郎其外国々の名酒

にんだう酒三がひ松の判官。標香酒ぶだう酒を

始として思ひ／＼の酒かんばんのさし物。壺弁

ます五合升壺合升のしるしを立われも／＼と

集りけるつがふ其勢三十万八千斤酒船打乗

酒袋の帆をあげ。かいげひさくを。おしたて。

「三オ

「四オ

「四ウ

薩广国へときき出^ヌたばこは此よし聞よりも

郎等共をよび出しにかになんぢら酒共がのり

いたすこそさいわひ也人をせいするにはさきん

ずるに利有といへり此方^{コナク}分^ク出^ヌむかへ中国丹^{タン}後^コ辺^ン

にて待うけた、かわんとおもふはいかにと申

ける中にも甲州廣葉の助横紙^{ヨコカミ}やぶりの

あらむしやす、み出仰のことく城にて待も

なまぬるしへんしもはやく出むかへさけの

したちの有上になか／＼舟にゆられしやねも

なくゑいたおれときやくはき出^ヌやつはらを

おさへて／＼押つぶさんはや立たまへと申ける

服口これを聞よりもこうしうのしよぞん

いさぎよしさりながら酒は水にちかし其上

酒ぶねにのり得てたれば舟軍達者なるへし

又せいのぶんざいを。てきにしらするもあしかり

なんみかたのぶしは火にちかく水^ニはとふし

きさみばんや駒にはのれとも舟には得てず

其上海上に日数ゆられては心もしめり。はし。

らく心あるべからず舟軍おほかなしとかく

しろにまちうけ。た、かわんにこなた^ニ七分

のつよみ有り此儀はいかゞと申ける大しやう

こくぶひと打うなつきしろをかためよせくる

かたきを今やおそしとまちかけた酒の

兵船いそぐにほとなく。さつまの国になりしかば

みな／＼舟よりとび上り国^ニが城を五こん七こん^ニ

とりまわし大鼓^{タイコ}樽^{ウルシヤウ}上戸^{ウシヤウ}出し口^{ウチ}うちた、き。

ときのごゑをぞあけにけり。ときの声もしづまれ

ば。大將みりん酒其日のしやうぞく^ニは焼酎^{セウチウ}おどし

の大よろい。そのうへに羽衣をふわりとちやくし

かぶと鉢を引かぶり酒ひさくの大小を。まへ

十文字によこたへて。杉の葉のざいをもち。

こしきの上につ、たち上り大おんじやうにて。名のる

やう。抑是は平の酒盛に九盃のこうゐんみりん

酒の入道浄閑也過^{スギ}し頃七尾の庄司にあたへし

ちじやく^(マヤ)をす、かんためこれまてはつかうせし

めたり命をしくばつるをはづしくきを

ぬきかうさんせよさもなくばおのればらこまの

ひづめにかけきざみすてん抑酒の徳やうは。

三国るてんのてうほうにて天竺^{テンシク}にては釈迦^{シヤカ}の

御弟子しやかたびく酒にてさとりをひらき

たまふ星の中にも酒屋有り弁財天のおん子

十五童子の其中に酒泉童子^{シヨセン(ママ)}は酒をまもらせ

「六オ

「六ウ

「五ウ

「五オ

「七オ

給ふ也神にとりては松尾大明神とて酒神有^リ

あしゆらはことに大酒にて大海に花をちらし

て酒を作りある人は祝の座敷にも遊山徒然^{トセン}の

くらし。どくをけし。かけんをもとめのむ時は佛も

歡喜したまふ也神酒^{ミキ}と名付て神へさ、げ

奉る酒しほと名付ては仏事法事^ニ用る、也

酒は是^{ガシヤウソウシカトコ}下若村之所^レ傳^{ツクラルカクムケ}傾^バ甚美哥^ニ有明の

心地こそすれ盃のひかりをそへて出ぬと思ひばと

故人^ニもほめて置れたりなんぢらが悪名申ふ。

なう先仏や神へそなへたるためしなし人々

これをのむときは。頭痛^{ツウウ}を起し口中^{コウチウウツマ}をいたため。

つかいを出ししよひやうにさわりふきからなどに

いたるまでもすれば火なんを出し世上の

あたとなる仏はさらわせたまふゆへ。ちしきは

たばこをのまぬ也身体煙草^{シシヤイ}のことく風に

したがつてやふれやすしとて人々是をさらふ也

あるひはむしにくわれつち葉となりあるに

かひなきくさり葉共やと一度^トに。とつとぞ。わらひ

けり。去程に国部は此よし聞よりもやくらの上へ

かけ上りたれやのものとおもひしにくくさり酒の

やつばらとやいつそやの手なみにこりす重而

「七ウ

はぢをかゝんとてまたくこれへよせたとや

やれく酒のかすでつちなんぢがみりん酒のみ

こんて人の上をばしる酒か口にまかせて。あま酒

な。すつか酒の手ほめする其手はくわざけおぬて

たも。口あたりのよきまゝにめつたにのんで。その

うへにおさへられてつぶれるな。三三九どふくだ

まくな。こちらにあふては。ならづけかすもふよい

ほどでとめかすよなんぢらこときのはかすをは。

たぐ一もみにかすもみよ。何ほどつよい。せう

ちうでも名もからさしななんはん酒むねを

つきわるとびきりでも。米沢たばこのいつぎくさ。

のじり西方たてしほり関東たばこの大ちから

ふんどうおもき大きんりやう。かるくどふりまわし。じゆ

くし。くさひ。やつばらをへんにかまはず何べんも

てうしかわりしやく替り。又かなをりのあら手を入替^{イレカ}へ

おさいてくしゐつぶさん其とき。あい農^{アイノ}。すけよと。

たのむとも。すけだちするものよもあらじうすば

といへる一もつの。こまのひづめにかゝるなよそちらて

じまんのしやかたびく酒に。正氣を。とり。うしなへ

道にたをれてふしけるが。しやくそん。そこを通らせ^{トワラセ}

たまへふびんの事に。おほしめしさもたへなる

「八オ

「九オ

「九ウ

御聲にて起し給へと目をさまさず。そのまゝ。すて置通りたまふあなんもくれん阿けんじや。大声あけておこし給へと目はさめず。とらを打ておこしたまへば。漸々は目をさまし。

阿そんじやを見るよりもいなやにおよばず。ふみ。

こがし。行衛もしらずはしり行。これより

してどら打びくとあだなをよぶ。そうじて

酒に正氣を取りみだし。身の上しらす。吞

すこし。あほうをつくすを。とら打と。云事は

此時よりまはじまる也佛道にては飲酒戒

とて。此時さらわせ給ふ。法花經方便品

仏事作善の其時に。酒をつよくもる人は

五百生が。其間。くるりくとへめぐりて。手の

なきものと生るゝよし。ときおかせ給ふ也。さてまた。

たばこの徳やうを。なんぢらこときの。なまゑいには

聞する事でなし。けふのいぐさかみに奉る。神道

にては。長命草。哥花たばこのめはそくじに

むしきへて。やまへなければ命長崎。とも

よまれたり。仏道にては眞若草古人之語に

一吸散朦眞若草。初先客に是を饗應すと

故人もほめて置れたり心くつした其ときも

「一〇オ

「一〇ウ

たばこをのめば氣をさんじ。つれなき道を行時も。

一人徒然のそのときも。たはこを吸へば友となる

これほと。徳有我々に手向は。蠟螂が斧なる

べし。壹斤當千のもの共。あれけちらせと

下知をなす。酒の方合いばらきといふつよむしや。

すゝみ出やにくさいたばこ共吸口まかせに

へらくと。おのれがあくみやうちらには。しなの

たはことおもふかや。色も香もなきいらぎつい。

くわんとうたばこのみすこし。ふられてあたま。

ふらくと。はいろづけのがんくびを。ちよつきり

切ばん切たはこ手取にしてはなたきざみ。はし

らぎすきたるやつはらを。きりこにせんと

の、しりける。時に七尾の庄司かすげの駒に

打のり。かん作りの大太刀を前十文字に。よこ

たへて酒かひげおつとり。舟よりづんと

とび上りいかにたばこのやつばら。過し頃の

いこんはらさん。そこを引などいふまゝに。多勢

が中わつて入。こんにかまわず切ちらす時に

しるの方より服部丹波守うすばの駒に打乗

て七貫目掛の大斤量にねつみやのきせる

うちつがひ。ゑいやつときつてはなせば。先に

「一一オ

「一一ウ

す、む七尾が郎等徳利五郎がほそくびに

はつしと立ッ何かはもつてたまるべきいぬいに

どどころびければ。酒けふりはつとたち。

酒はこぶくこほれける。あらいたわしのわか者

やと。上戸も下戸も押なべて。のまぬものこそ

なかりけり。七尾の庄司こらへかね。そこを

引な丹波守。おのを打て。徳利五郎に。たむ

けんと。一もんに打てかゝる時。會津たての

五郎は。うすやうおどしの大よろい草ずり

ながにざつくと着。しんちう作りのきせるをさし。

さかわばりの大長刀まつかうにさしかざし庄地

に打てかゝる庄地こゝろへたりと酒かいにて

てうどうけ。まつこうにうちかくれば。何かはもつて

たまるべき。がんくびちよいと打おとし。らう竹

わりといふものに。吸口かけてわり付たり。

かゝる所へ宇治之住人初昔権の守坪房美濃

の国住人足長出葉の庄司。茶坪茶臼に打乗

白昔後昔大鷹爪右衛門其外葉武者共を

引ぐして。一さんにかけて来り。両ちんの間に立

ふさがり。これくさうほういぐさをやめ。

しづまつてよくきけ。みかどよりのちよく

「一二オ

でうには。酒と煙草は車の両輪茶は車の真木

一方かけても。せかいはたゝす。茶は佛に供じて

仏道。酒は神にそなへて神道也たばこは客を

もてなして儒道也。酒は登りて色赤日に

ちかく。陽にして天なり茶はしつんで淡と

なつては色しろく。月にちかく陰にして地也

煙草は其色黄にして中央をかたどり。人輪

にて是天地人の三さいなり。いづれも勝劣有

べからず。いそぎまかりむかつてしづめよとの。

せんじちやにて兩人これまでむかふたり双方

いきどふりをはやくやめ。わぼくせしめ。

三方心をあわせ。うきよの人をもてなさん。いざ

もつともとわぼくして。皆國々江帰りける

さてこそ酒と煙草中なをり。今に浮世に

てうほうせり

「一二ウ

阿部氏

安永四年乙卯月吉日写之重往「花押」

酒得失之論

傳聞素盞烏尊手摩乳足摩乳をして

「一三オ

「一四オ

「一三ウ

やしはやはらの酒を造らしめ給ふ是我国酒の

源とかや其後應神天皇の御宇百済の仁音と

云ふもの我朝に渡り酒を造りしとも云り

氣の大熱にして味宜^ク甘辛し百邪悪毒の

氣を殺すものは酒の手柄なりけらしされは

往古より世に弘^ク千歳の今も人の愛するとかや

しかも善とする時は是に過たる善なし

悪とする時は是に過たる悪もなし或は酒故に

倉庫を空虚となし又は百歳の命を失ひ或は

任便をして喧嘩口論をし又は人を打擲す

しかあれと彼は酒の科にあらずして人の科也

故に酒人を吞人酒を吞と云り樽酒の徳と

称^{スル}謂は凡上は王公より以下士庶人^ニ至る迄

あら玉の手立觸る朝には三々九度の盃に

一手の計をなし弥生には桃酒端午には

厲蒲酒薺姫の薄き熱りも天の川に

名残り酒をたゝへたり八朔は言ふに覃す重九

には菊酒とよんで齡久しき事を祝^ス鷺の初

音もいつか引かへて蜀魂の聲せわしなし妻戀ふ

鹿も音を入れて鴨の吸物とは轉變すれとも一日も

酒なくてはならぬものは雪の且や時雨の雪の寒

には酒を以て寒を凌^キ車力駕籠かきの類も

一盃の酒に千里を飛行し芦原品川の菊や

揚屋の調子高なきメリヤスも酒かうたはすると

聞へたり婚姻の坐席はいふも更也傾城遊女の

口舌の床には客の魂有頂天に飛て山吹の華を

散^ス朋友親族の不和も一樽の酒のみちなみを捨す

移徒昇進の家にいくはくの金を賣菓の水

は紫を染なす手柄はあれと名酒は京都大坂に

限^リ七年酒五年酒三年酒満願寺伊丹池田松本

味酒菊印星印なんと、いろく^ののしるしはあれとも

善人の好好きによりて等しからすあわもり

は鼻をへし蒲萄酒忍冬酒梅さけは賤し

からぬ薫^リあり白酒は富士の高根に雪を

ふらし全城に山川の名高砂のまつ^の白髪より

白し甘酒は下戸好もの^{にて}饅頭^ニ入るは少し

異なり王子酒は督の補ひ生姜酒は少邪を發

散す栢さけ蕨さけ物好の初候へ葉は長寿を

保といへとも黄栢黄芩の類は酒製を限^リ醬油

味噌は含を進る長たりといへとも酒塩の加減第一

也然るに神に奉るを神酒と言さしといふは女の

詞成へし貴人^{江上}に盃すゝかされともきた

「一五オ

「一四ウ

「一五ウ

「一六オ

なきとせず下戸ならぬこそよしとほめられしは

「一六ウ

丁酉四月下旬四日小林氏と写し取ル

「一七ウ

吉田氏も酒好と聞へたり夜伽なる気背を散し

戀の仲たちともなれりされは其人に依て善悪せんあく

の差前有事は縦は東方塞か虎胤の論二等し昔

農に行人有三人逢大寒粥を合せしものは

病空服マツなるものは死す酒を呑しものは果然

として無恙と聞り冥や顔回は瓢箪酒賢

通を得我朝の義盛は大儀の宿シマツに和田酒盛

の浮名を残ス佛も五戒の内へ入れ給ひ共祇陀太子

にはめされ孔子も無計は不及乱との給ひしから

「一七オ

能加減に吞てそよけれつらく退て考るに

天地に有陰陽物ニ有剛柔人ニ有善悪酒

に有得失酒を呑悠々凌て海量としてしかも

得る事あらは吞べしさを呑快々として心神

てんどふししかも失スルあらは成へし然れとも狸々は

我か輩にあらされは何を論スル足らんや

蚊も蠅もさけニ目はなし

夏座席